

‘さやまかおり’は毎年二番茶摘採後に 深刈りできる

茶業技術研究担当 ○高橋 淳、上保貴則、佐野行正、山崎健斗

1 ねらい

これまで埼玉県では、二番茶摘採後の深刈りなどの更新処理は秋芽の生育期間を十分に確保できないため勧めていなかった。しかし、近年、秋期の気温上昇の影響により秋芽の生育期間を十分に確保できるようになった。また、乗用型茶園管理機の導入により樹高を抑制したチャ栽培が求められている。そこで、二番茶摘採後の深刈りなどの連年更新により樹高を抑制して栽培し、収量への影響を確認したので報告する。

2 研究内容

(1) 試験区の構成

処 理 区：慣行区（二番茶摘採後の整枝高さ：二番茶摘採の高さ）

浅刈り区（〃：春整枝の高さ）

深刈り区（〃：葉層がなくなる高さ）

※ 茶園管理は二番茶摘採後の整枝高さ以外は慣行法で実施した。

試験期間：2020年二番茶摘採後～2025年二番茶摘採まで実施した。

試験面積：‘やぶきた’ 各区約 1.4a（25m×3 畦）

‘さやまかおり’ 各区約 1.1a（21m×3 畦）

(2) 試験期間中の樹高の推移

樹高が乗用型茶園管理機で管理できなくなった場合、一番茶摘採後に 70 cm または 60 cm の高さで中切りを行った。試験期間中の中切り回数は、‘さやまかおり’の慣行区および浅刈り区は 2 回、深刈り区は 0 回であった（図 1）。‘やぶきた’も同様に慣行区および浅刈り区では 1～2 回、深刈り区は 0 回であった（図表省略）。

(3) 二番茶摘採後の連年更新による収量への影響

‘さやまかおり’の一・二番茶の 5 年間総収量は、中切り更新がなかった深刈り区が最も多く（図 2）、‘やぶきた’も同様の結果であった（図表省略）。経済性が高い一番茶だけの 5 年間総収量は、‘さやまかおり’では深刈り区および浅刈り区が慣行区より多かったが、‘やぶきた’では慣行区が最も多かった（図表省略）。‘やぶきた’は、連年更新により寒干害やクワシロカイガラムシの被害による枝枯れが樹冠面に露出していた。そのため、摘採面積が減少し減収したと考えられる。

3 解明点および留意点

(1) ‘さやまかおり’は、毎年二番茶摘採後に深刈りすることで中切り回数が

減少するため長期間の総収量は増加するが、単年の収量は減少する場合もある。そのため、長期的な経営・茶園管理計画を要する。

- (2) ‘やぶきた’は、二番茶摘採後に深刈りすると、翌年の一番茶収量が減少する傾向がある。
- (3) 樹勢が強い品種（‘さやまかおり’、‘おくはるか’など）では毎年二番茶摘採後に深刈りできる可能性がある。

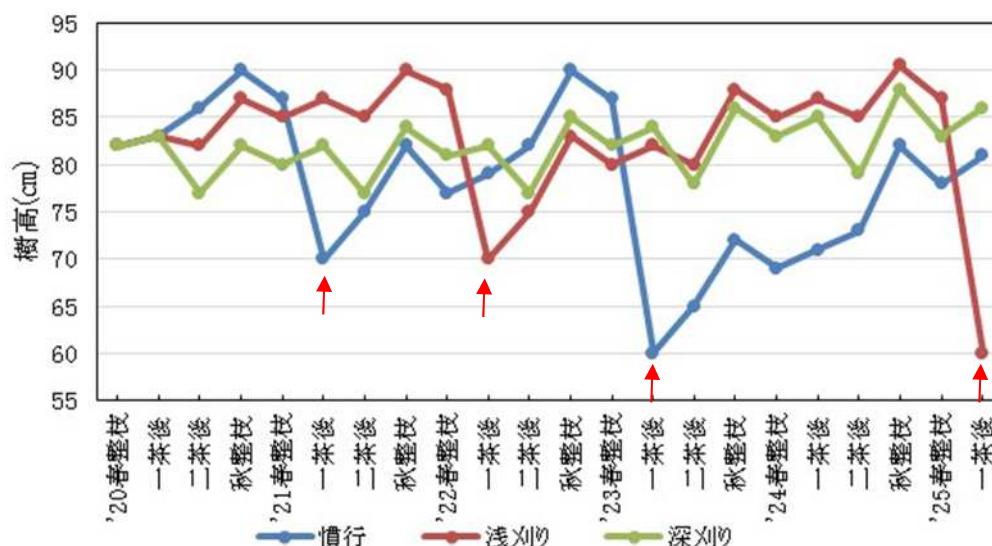


図1 ‘さやまかおり’における試験期間中の樹高の推移
図中の矢印は中切りしたことを示す

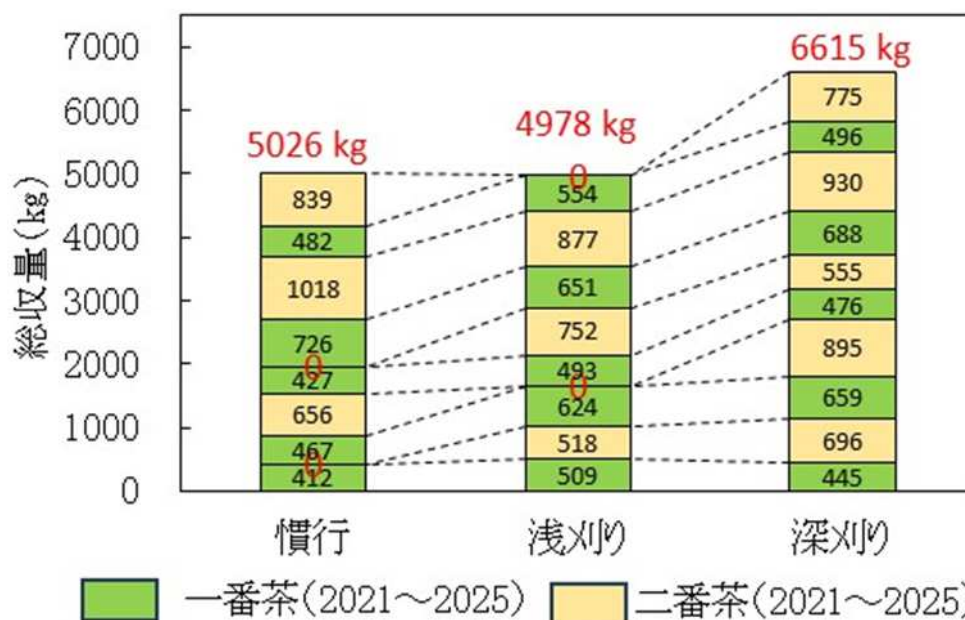


図2 ‘さやまかおり’における一・二番茶の5年間総収量（kg/10a）

本試験は、入間茶研究会の提案を受け課題化し、同研究会ご協力のもと実施した